

日本國天皇家論 章 上宮聖王

日本國天皇実伝

真実の上宮法王

船氏王後の墓誌

江戸時代、墓誌が大阪府柏原市国分市場から出土した。「船氏王後」墓誌といわれるものである。墓誌の表裏に次の文が刻まれている。

(表)

惟船氏故王後首者是船氏中祖王智仁首児那沛故首之子也 生於乎娑陀宮治天下天皇之世奉仕於等由羅宮治天下天皇之朝至於阿須迦宮治天下天皇之朝 天皇照見知其才異仕有功勳勅賜官位大仁品為第三

惟うに船氏の故王後(おうご)の首(おふと)は、是れ船氏の中祖(なかつおや)王智仁(おうちに)の首の児(こ)那沛故(なはこ)の首の子也。乎娑陀宮(おさだのみや)に天下(あめのした)治(しろしめし)し天皇(敏達)の世(みよ)に生まる。等由羅(とゆら)の宮に天下治らしめしし天皇(推古)の朝(みかど)に仕え奉り、阿須迦宮(あすかのみや)に天の下治らしめしし天皇(舒明)の朝に至る。天皇、照見して、其の知才を知り、仕えて功勳有り。勅(みことのり)して官位大仁を賜い、品第三と為す。

(裏)

三殞亡於阿須迦天皇之末 歳次辛丑(641)十二月三日庚寅 故戊辰(668)年十二月殯葬於松岳山上 共婦安理故能刀自同墓 其大兄刀羅古首之墓並作墓也 即為安保万代之靈基牢固永劫之宝地也

阿須迦の天皇の末に殞亡す。歳は次辛丑(かのとうし)に次(やど)る十二月三日庚寅(かのえとら)。故(かれ)、戊辰(つちのえたつ)の年十二月、松岳山の上に殯葬す。婦(つま)安理故能刀自(ありこのとじ)と共に墓を同じくし、其の大兄刀羅古(とらこ)の首の墓と並びて墓を作る也。即ち為安保万代(よろずよ)の靈基を安保し、永劫の宝地を牢固にせんとすなり。(大阪府立「近つ飛鳥博物館」)

王後は、船氏の中祖王智仁の子、那沛故の子といわれる。乎娑陀(おさだ)天皇の世に生まれ、等由羅天皇の朝に仕え、阿須迦天皇の時、冠位十二階のうち第三位の大仁を賜った。阿須迦天皇の辛丑の年(641)12月3日に亡くなり、戊辰の年(668)12月に「松岳山」の上に葬られた。墓は婦の「安理故能刀自」と共にし、兄の「刀羅古」の墓と並んで作られた。これほど有能な行政官でありながらその記録は推古紀にはない。

だが船氏王後の名前はないがよく似た人物が推古紀に記録されている。

推古紀・船手王平とは船氏王後

6月15日、客ら難波津に泊まり。この日に、飾り船三十艘をもって客らを江口に迎えて、新しき館に安置する。ここに中臣宮地連鳥摩呂、大河内直糠手、船手王平をもって掌客とす。(日本書紀)

唐の国使を迎えるための接待三人が紹介されている。その一人が「船手王平」である。頭注は「他に見えず」と書き、不明としている。しかし「船」という名前から察してこの人物が「船氏王後」であろう。日本書紀が名前を改竄している。

王後は「掌客」として唐からの客を接待した。推古紀の遣唐使の記事は607年である。この時は中国王朝は随である。推古紀編者は遣唐使の事実を正しく書きながらその年代を誤っている。推古紀編者は12年(一回り)早めて記載した。第一回遣唐使は619年である。王後が唐の客の「掌客」に任命されたのは620年である。

船氏王後の墓誌の天皇は上宮法皇

墓誌によると、天皇は乎婆陀(おさだ)ー等由羅(とゆら)ー阿須迦(あすか)と三代続く。等由羅天皇の朝に仕えて、阿須迦天皇の時「大仁」となった。死亡は阿須迦天皇の世、641年である。

- (1) 第一回遣唐使は619年である。唐の答礼使が来日したのは翌年620年である。王後が「掌客」を勤めたのはこの時であろう。
- (2) 遣唐使を派遣した国家は日本國である。その時の王(天皇)は上宮法皇である。船氏王後を唐からの客を迎える「掌客」に任命したのは上宮法皇である。
- (3) 王後が「等由羅(とゆら)の宮」の天皇を記した天皇は上宮法皇である。ここには女帝推古天皇の姿はない。国王は上宮法皇である。

日本書紀・推古九(601)年の春二月に、皇太子、初めて宮室を斑鳩に興てたまふ。

上宮法皇は斑鳩に住み、愛馬黒駒に乗って飛鳥の政庁に通ったと伝えられ、現在でも斑鳩と飛鳥を結ぶ太子道が残る。601年、上宮法皇は初めて宮を斑鳩に建てた。ではそれ以前はどこにいたのか。等由羅に上宮聖王の宮があったと読むべきでしょう。等由羅は「豊浦」と変換されるが「豊浦」は彦島に存在した港の名前である。二つは異なる名前である。

- (4) 阿須迦(あすか)天皇の代に成熟した有能な政治家として働き冠位一二階の第三位である「大仁」となった。冠位一二階は日本國が定めた官位である。

王後 墓誌	乎婆陀天皇	等由羅天皇	阿須迦天皇	
	誕生	出仕 掌客(日本書紀)	大仁(第三位) 641年12月3日死亡	
		上宮聖王 (591年~622年) 第一回遣唐使619年		

国名は日本國

- (1) 古代関西に国家が存在した。諸外国から「日本」と呼ばれ、自身は「大倭」と記述していた国家である。この国家は朝鮮半島の「百濟」「高句麗」「新羅」と深い国交を結んでいた。また「隋建国」「唐建国」の際、祝賀の国使を送り、国際的に開かれた国家であった。
- (2) その都は飛鳥にあった。また国際港は難波(大阪難波の宮)にあった。「隋使」「唐使」「新羅使」などの国賓は難波に上陸し迎賓館で迎えられ、竹内街道を通して飛鳥まで案内された。現在、大阪・奈良に残る古墳、

例えば桜井市の「箸墓古墳」「桜井茶臼山古墳」はこの国家の歴代の墳墓である。或いは堺市の「仁徳陵」も古代国家日本國王の墳墓である。

国王は上宮法皇

- (1) 実在が確かめられる王は上宮法皇である。上宮法皇の実在は法隆寺釈迦三尊像光背銘・隋書倭国伝・唐国書・西方院・広隆寺縁起等が証明する。法興元年(591)に即位、法興22年(622)に亡くなった。上宮法皇とは法名である。実名は不明である。隋書は「其王多利思比孤」と書く。国際思想であった仏教を國教として導入したのは、この王であった。
- (2) 日本國の有力な豪族は蘇我氏・小野氏・物部氏であった。上宮法皇が誕生した時、その養育係として三人の姫が撰ばれた。その三人はこれら豪族の娘だった。上宮法皇が622年亡くなった後、三人は出家して尼となりその菩提を弔った。上宮法皇の養育姫の墓は磯長陵の向かいの丘に存在する。この三人の尼の伝記は日本書紀の説話と大きく異なる。
- (3) 冠位12階制定は、この王の政治改革であった。有力氏族だけでなく、有能な人材を求めたのである。「百濟」「新羅」「高句麗」から多くの人材が渡日して政権の中樞を担った。京都・太秦の広隆寺を建てた秦河勝もその一人だった。
- (4) 日本書紀のみが上宮法皇を天皇家の皇太子として描く。日本書紀では推古帝が592年に即位した。同じ國にはほぼ同時期に二人の君主が存在したことになる。どちらかが虚構である。上宮法皇の伝記・伝承、或いは「隋書」「唐国書」には女帝推古は全く登場しない。また推古天皇実在の証拠となる事物は関西のどこにもない。推古天皇一皇太子像は日本書紀編纂者が作り出した仮想現実である。
- (5) 上宮法皇の墳墓は叡福寺にある。玄室には王・妻・母の三つの石棺が存在する。法隆寺釈迦三尊光背銘が記録しているように、621年に王母、622年2月21日に王后、622年2月22日に上宮法皇の三人が相次いで亡くなった。
- (6) 上宮法皇が亡くなった時の状況を日本書紀は次のように描写している。

(推古)29年2月5日、半夜に厩戸豊聡耳皇子命、斑鳩宮に薨りましぬ。是の時に、諸王・諸臣及び天下の百姓、悉に長老は愛き兒を失へるが如くして、鹽酢(しほす)の味、口に在れども嘗(な)めず。少幼は慈(うつくしび)の父母を亡へるが如くして、哭(な)き泣(いさ)つる聲、行路に満てり。乃ち耕す夫は耜(すき)を止み、春(いねつ)く女は杵(きぬおと)せず。皆曰はく、「日月輝を失ひて、天地既に崩れぬ。今より以後誰を恃(たの)まむ。」といふ。是の月に、上宮太子を磯長陵に葬る。

万民の哀しみを伝えている。亡くなったのは、民衆にかくも愛された、日本國王・上宮法皇であった。この肝心要の真実を日本書紀はばかしている。神武天皇家の皇太子が亡くなったのではない。日本國王・上宮法皇が亡くなったのである。陵は磯長陵である。叡福寺は日本書紀が名前を厩戸豊聡耳皇子命と微妙に変え、命日を2月5日と変更したにもかかわらず、眞の命日2月22日を1400年間守りぬいてきた。日本書紀には母、妻の埋葬記事はない。恐らく埋葬の事実の詳細を編纂者たちは知らなかったのであろう。

上宮法皇の真実

古代関西には日本國が実在した。その代々の天皇の中で傑出していたのは上宮法皇であった。「憲法制定」「官位制定」「法興寺建立」「遣隋使・遣唐使派遣」「百濟・高句麗・新羅との国交」等々、偉大な業績を残した。日本建国の父とも云うべき天皇であった。

日本書紀はこの真実を隠蔽して推古天皇一皇太子像を作り上げた。これは日本書紀編者が作り出した仮想現実である。日本書紀・推古紀は日本國天皇・上宮法皇紀として読まれるべきである。

日月輝を失ひて、天地既に崩れぬ。今より以後誰を恃(たの)まむ。

上宮法皇は國民に信頼された天皇であった。

諸王・諸臣及び天下の百姓、悉に長老は愛き兒を失へるが如くして、鹽酢(しほす)の味、口に在れども嘗(な)めず。少幼は慈(うつくしび)の父母を亡へるが如くして、哭(な)き泣(いさ)つる聲、行路に満てり。乃ち耕す夫は耜(すき)を止み、春(いねつ)く女は杵(きぬおと)せず。

上宮法皇は国民から慕われた天皇であつた。法隆寺・救世観音像は上宮法皇の生き写しと伝えられている。救世観音像は長身で、口元に優しい微笑を浮かべている。この上宮法皇像は明治まで隠匿させられていた。日本國の人々にとって絶対的な存在であつた上宮法皇は新支配者にとっては、恐るべき存在だったからであろう。



救世観音像（法隆寺）